［課題］

【第２回課題】（1500 字～2000 字程度）
社会契約論とそうでないタイプの市民社会論の思想家の思想をそれぞれ少なくとも一人取り上げ，比較し論じなさい。なお，原典（日本語翻訳でよい）にあたり，論述の各要所で原典から引用しながら解答してください。

［本文］

人が約束して国家を作ることを社会契約論と呼ぶ，この考え方を最初に提示したのはホッブズ（1588-1679）である。ホッブズの考えでは最初に社会がなかったことになるので，社会を作る理由が必要となる。そこで，ホッブズの『リヴァイアサン』では，万人対万人の戦争という自然状態から身を守るために，絶対主権による統治が必要であると説いた。[1]

> 人々は，すべての人々を威圧しておく共通の力をもたずに生活しているあいだは，かれらは戦争と呼ばれる状態にあるのであり，そして，かかる戦争は，各人の各人にたいする戦争なのである。（中略）各人の各人にたいするこの戦争にかんしては，なにごとも不正ではないということが帰結される。正・邪，正義と不正義の観念は，そこに存在する余地がない。共通の力が存在しないところに法はなく，法のないところに不正義はない。（中略）また，前述の状態の必然的帰結として，そこには所有も支配もなく，わたくしのものとあなたのものの区別もなくて，各人が獲得しうるものだけが，かれのものであり，しかも，かれがそれを保持しうるかぎりそうなのである。

この社会契約論を受け継ぎながら，ホッブズが切り捨ててしまった「所有」をキーワードにして発展させたのが，ロック（1632-1704）である。ホッブズの言う万人の戦争状態がなかったとしても，いまこの世界のものの多くは誰かが働いて作り変えたものである。その人たちの所有権を認めることで社会秩序ができるのだから，その秩序を守って誰も横取りしないようにするための政府が必要だと考え，国民の所有権を守るために権力を信託された政府が必要であると説いた。[2]

ロックは『統治論』の中で次のように述べる。[3]

> 大地と人間以下すべての被造物はすべての人々の共有物であるが，しかしすべての人間が，自分自身の身体に対する所有権を持っている。これに対しては，本人以外のだれもどんな権利ももっていない。彼の身体の労働とその手の働きは，まさしく彼のものであるといってよい。そこで自然が準備し，そのまま放置しておいた状態から，彼はこれに自分の労働を混合し，またこれに何か自分自身のものをつけ加え，それによってそれを自分の所有物とするのである。

ロックは，私たちは自分自身に対する所有権を持っており，それに基づいて他のものに「労働」を加えることによって，もともとの自分自身への所有権が他のものに拡張されてゆくというロジックを提起している。簡単に言えば，働いて得たものは自分のものになるので，労働に対する意欲が湧いてくるという論理である。[4]そうした人間本来が持つ所有欲が労働意欲を喚起し，自由貿易を促進し，資本主義の発展につながると考えた。そして，そうした人間の欲求を十分に満たす環境を守るための政府の必要性を説いたのである。

また，日本の政治思想史学者の丸山眞男（1914–1996）は，大学３年次の『緑会雑誌』に「政治学に於ける国家の概念」（1936）と題した論文を発表している。ロックの唱えた所有に対する欲望は個人主義を拡張させ，やがて，資本主義の矛盾が露呈してしまう。そうした中で，大衆と社会を巧妙に束ねる全体主義的な国家観が生まれてくることを警告している。

> 1648 年と 1789 年の革命に於て，封建社会を排除して華々しく登場した近世市民社会はヘーゲルがいみじくも喝破した如く欲望の体系である。……従って市民社会は何よりも経済社会である。……ここでは……各人はひとえに個人的欲望のために生産する。しかるにその生産は社会的生産としてのみ，それが社会的欲望を充足する限りに於てのみ意義を持つ。かくて彼等の生産物の社会的必要性は交換によって確認される。市場に於ける交換契約によって始めて原子的に分裂した私的生産者は社会的全体にまで総括される。まさしくここでは『社会』は個人の契約によって成立つのだ。従ってこの社会に於ては結合ならしめる社会的規制は決定的な重要性を持つ訳である。そうしてこの規制は本来私的意欲の下にのみ生産する個人の内に意識的基礎づけを見出す事が出来ないから，それは外的な力によって支えられねばならない。国家権力はかかる使命を帯びて登場する[5]

丸山は戦前の学生時代から，教会やギルドの制約から解放されたブルジョワ市民社会がファシズムへ変質していく歴史的変化を見ていたことがわかる。治安維持法国家の中であったので，論文の用語にも気を配っているが，私的利益をとことん追求する市民社会を是正するもう一つの方法として,マルクス主義を対置していたことは読み取れるであろう。[6]

以上，ホッブズ，ロック，丸山眞男を取り上げた。３者とも個人と社会のあり方について論じているが，ホッブズやロックがカトリック教会への反発として，個人の経済的自由と社会のあり方を説いたのに対し，丸山は個人の経済的自由よりも平等を重視する社会を描いた点が大きく異なる。

文字数：2,017 字

＜引用・参考文献＞

---

[1] 水田洋『ホッブズ　リヴァイアサン』（世界の思想：13）河出書房新社，1969，pp85-87

[2] 大城信哉『現代人の悩みをすっきり解消する哲学図鑑』誠文堂新光社，2013，pp.71 参考
[3] 宮川透『ロック　統治論』中央公論新社，2007，pp.33
[4] 同上，pp.14-15 参考
[5] 丸山眞男「政治学の於ける国家の概念」『丸山眞男全集』（第 1 巻）岩波書店，1997，pp.10-11
[6] 平石直昭「丸山眞男の『市民社会』論」『丸山眞男論：主体的作為，ファシズム，市民社会』（小林正弥編）東京大学出版会，2003，pp.180-182 参考